

大庄屋文書から見た酒田の世相（十一）

須藤 良弘

内町組大庄屋・伊東家と米屋町組大庄屋・野附家の文書（酒田市立光丘文庫所蔵）からで、原文の句読点は筆者が付け加えたものである。

一、日蓮宗不受不施派への弾圧

酒田におけるキリスト教禁令については『酒田市史 改訂版・上巻』に、寛永六年（一六二九）の信徒の殉教、その後のキリシタン改めなどが記されている。寛文十年（一六七〇）のキリシタン改めに対する内町組大庄屋の斎藤・三丁目（目）の報告書（伊東家文書『寛文八年申四月 留書帳』）については前号の「酒田の世相 十」で紹介している。その内容は、内町組家数二百五十六軒を名主と町々の五人組が調べたが、キリシタンは一人もいないし、法花不受不施の者からの寺請證文も取っていない。さらに他所より浪人がまぎれ来ないよう吟味し、はつきりしない場合は注進する。もし偽りをいって、脇から顛われた場合は、どんな罰でも受けるというものであった。

今回は寛文十年以後の不受不施派の禁止について紹介する。法花（日蓮宗）不受不施派は法華經を信じない者からは、施しも受けないし、施しもしないことを主張する派で、幕府から弾圧されていた。寛文九年には不受不施派の寺請も禁止された。

元禄四年（一六九二）、「口上之覚　日蓮宗之内不受不施之儀ハ、從兼而御制禁二候、然處、小湊誕生寺・碑文谷法花寺・谷中感應寺悲田宗と号、不受不施之新義相立候付、今度悲田宗堅ク停止被仰付候而、宗旨相改候而後、悲田之輩受不施二成とも、又他宗二成とも心次第二改可申候以上」（伊東家文書『諸帳之内抜書　御用永録』）。不受不施は前々から禁止していたが、小湊誕生寺などが悲田宗と名を改め、不受不施の新義をたてた。これを禁止する。悲田宗の者が宗旨を変えて、不受不施とは反対の受不施になっても、他宗になっても心次第である。

厳しく禁止されている不受不施は絶えることがなかったことから、寛政七年（一七九五）、「右之通從公義被仰出候間、可被申渡候　卯十月」（伊東家文書『寛政七年　御用日記』）が出された。

「上総国・下総国村々百姓共、日蓮宗不受不施之傳法を習受、其身ハ勿論、人ニもすすめ重き御仕置二相成候者も有之、近年二及び候而も、不受不施之僧俗重科ニ」処せられた。このように処罰された「右之内ニハ、新門徒又ハ内信心等と名を付、前々御仕置二相成候不受不施之僧を日蓮同様ニ尊敬いたし候者、或ハ何も弁なく右ニ加り候者迄も咎受候者、畢竟其所之支配人・村役人等心付方不行届故之儀ニ候」。新門徒や内信心と名を付け、前に処罰された不受不施の僧を日蓮同様に尊敬したり、何もわからずに加わって処罰されているのは、その地の支配者や村役人の心付きがたりないからと。

続いて「農業を專一二いとなみ、分限二應し先祖之法事追善等執行候者勿論之儀、いとまあるもの者佛道を信じ候者勝手次第之事二候得とも、日蓮宗之内受不受之訳等者、百姓ともの論すべき事にあらず、」。農業第一。身分にふさわしく先祖を供養することはもち論である。余裕のある者が仏道を信ずることは勝手次第であるが、受不受については

百姓が論すべきことではないと。

さらに続いて、公儀より認められている「宗門之外、帰依」してはいけない。「怪敷宗法之持方等」してはいけないし、「重而、不受不施類之宗門相持候者有之候ハハ、当人ハ不及申、其所之もの迄も厳科」にする。「右両国（上総・下総）之外ニも不受不施者勿論之儀、都而、何宗ニよらず、異風なる就行致間敷候、萬一、申勸候者於有之者、其所之奉行所並御代官、私領者領主・地頭江可申出候、此旨、御料者御代官、私領者領主・地頭より無洩様可申渡候 右之趣可被相觸候 八月」。不受不施はもち論だが、何宗であっても普通とは違ったやり方をしてはいけない。そのようなことを勧める者があつた場合は幕府領では代官に、大名領では藩主・地頭に申し出るよう。この事を代官・藩主等はおれなく伝えるようにというものである。

二、武士への無礼禁止

亀ヶ崎城の武士に対して、酒田の町人に無礼な行いがみえてきたものか、元禄三年（一六九〇）に町奉行所より次の通達が出された（伊東家文書『御町中申渡候品々控之覚』）。

「一、御町之者共、自今已後あしたはき間敷候、道悪敷節ハけたをはき可申事」。町人はこれから以後、足駄をはかないこと。道が悪い時は下駄をはくように。町人は普段はぞうりで、足駄は武士の特権であつたのであろうか。

「一、御家中之面々江、御町之者共慮外ケ間敷様子在之段、相聞江候、向後左様成者於有之二者、急度可申付事」。藩士に対して、酒田の者共が無礼がましい様子があると聞こえてきたので、今後このようなことがあつた時には、必ず罰する。

「一、御家中之面々江、御町之者共、不禮無之様ニ、諸事入念遣可申付候、路次中ニ而御家中衆ニ逢候節ハ、けたをぬき、下場可仕候、惣而見せ棚ニおひても不形義ケ間敷仕間敷候」。藩士に対して無礼がないように、町の者共に何事についても念を入れるよう申し付けること。路上で藩士に逢った時には、下駄を脱ぎ、しゃがむように。店でも不行儀な行いはしないように。

「右之通堅相守候様ニ御町中江可被申付候已上 元禄三年午三月」。この申し付けに対して「右御書出之趣奉拝見、本屋者不及申上ニ、名子・棚借之者共迄、急度相守可申候、若相背申者御座候者、何様之曲事ニも可被仰付候、」と、「同年四月朔日」に「本屋・名子・棚借之者迄連判」し、それに「肝煎・両人（内町組大庄屋）」の加判の上、「御町奉行所」に出された。申し付けの趣旨がわかったので、本屋はもち論、名子・棚借の者にも必ず守らせる。もし違反した時にはどんな罰でも受けるというものである。

なお、本屋とは屋敷持ちである。「役家」ともいわれている。間口四間〜五間、奥行二十間〜二十八間、約百坪の屋敷が一軒屋敷で、「御役下」屋敷として、その所有者は十分（歩）の税を負担した。税の歩率は酒田町組・米屋町組・内町組の所在場所などでも異なっていた。二軒屋敷、三軒屋敷、逆に狭い三分屋敷・五分屋敷などもあった。名子は借地者で、棚借は借家している者と思われる。慶長十七年（一六二二）の「酒田惣中いへかまと人数ノ一紙」（伊東家文書）にある「御やく致候もの」がここでの本屋で、「なこ」は名子で、「宿かり」とは棚借のことではなからうか。

三、湯銭の高騰

幕末期は米をはじめとして諸物価、職人の手間賃などが異常に上昇した。ここでは野附家文書『元治式年 御用控

酒田町組米屋町組』から、湯銭の値上げの経過を紹介する。「丑閏五月」（慶応元年、一八六五）、「湯屋年番弥兵衛・兵藏」から三十六人衆年寄役二木と三組大庄屋の渡辺・斎藤・佐竹に次の「乍恐以口上書奉願候」が出された。

「私共業体湯銭之儀、去子三月中八文ニ奉願候所、以御威光願之通被仰付、難有仕合奉存候、然處、当年二至、薪値段者勿論、諸品共追々不得止事莫大之高値ニ相成、一同募方行届兼候ニ付、亦又奉願候茂恐多奉存候得共、何卒薪並諸品下値ニ相成候迄、忝人ニ付拾文ニ被仰付被下置候ハハ、一同難有仕合ニ奉存候、此段格別御憐憫之思召ヲ以、願之通被仰付被下置候様、宜敷御沙汰被成下度奉願候以上」。

湯屋業の私共が願ひ出て、昨年（の元治元年（一八六四））三月に湯銭を八文にして頂いたが、今年になって薪はもち論、諸品も止むことなく高値になり、暮らすことができないので、薪などの値が下がるまで、湯銭を十文にしてもらいたいというものである。

これを受けて同月、年寄・大庄屋から江戸や他領でも薪が高値で、湯銭が引き上げになっていると聞いているので、「湯銭之儀、江戸者勿論御他領ニ而も、薪高値ニ付、湯銭引上候様ニ茂相聞候間、何分厚御沙汰被成下度奉存候」が酒田町奉行所に出された。

同年閏五月二十二日、（酒田町奉行金井）「國之助」が（鶴ヶ岡町奉行井上）「数馬様」に、「爰元湯屋共、当時薪並油等格別之高値ニ而、業体難相成、甚難渋ニ付、湯銭値段増之儀、別紙之通願出候間、右書面一通差遣候、御家老中江宜敷御申上被下度」と、湯屋の願書を家老に伝え、家老の「可得御意」を頼んだ。

六月十六日、数馬から國之助への返信。「〓御家老十藏殿へ申上〓」たところ、同日付で「末松十藏」から数馬へ、「酒田湯屋共湯銭増之儀」は、次の「御郡代付札之通」を國之助に伝えるようにというものである。

「湯屋共願書御郡代付札

書面 酒田湯屋共、去三月中湯銭増方被仰付候所、当年二至、薪猶又莫大高値ニ相成候趣を以、又々湯銭式文増拾文ツ

ツニ被成下度旨申上、御町奉行申上候付、評義被仰達候、薪昨年より何程高値ニ付、今度増方之趣意も不相見、年々増方と申義無濟限次第二候得共、一体諸色も昨年より引揚候訳も御座候間、当分之内昨年以來之八文江壹文増、壹人前湯錢九文ツツ請取候様可被仰付哉」。

昨年三月に値上げしたのに、又も値上げの願ひ。薪が昨年よりどの位高値になったのか、値上げの理由もわからない。年々値上げでは際限がなくなるが、諸物価が上がっていることもあるので、十文でなく、一文増の九文に仰せ付けてはどうか、というものである。そこで次の「湯錢九文増ニ被仰付候 左之通」が出された。

「嘉永三戌年（一八五〇）六文之所 一、男女十五才以上 九文 同断二文之所 一、同当才より五才迄 三文 」。六才より九才迄の三文が五文に、十才より十四才迄の五文が七文に、「右之通湯屋共へ被仰付候 六月十八日」となった。

八月に入ると、又も湯屋の「定年番」弥兵衛・兵藏から年寄・大庄屋に、近ごろ薪・油・召使の給金、その他いろいろな物が大変な高値となった。そこで湯錢の値上げをお願いし、そのたびごと願ひを聞いていただき、今年の夏には九文にしていいただき感謝している。ところが薪などの値段が又も高くなり、別紙で申し上げるように、いろいろな物が前代未聞の高値となり、七、八年前と比べても三倍となった。それでは湯屋業を続けていくことができない。又も願ひ出るのは恐れ入るが、何とか情けをかけていただき、当分の間、湯錢を十文にしていいただければ、湯屋業が永續できるとして次の「口上書」が出された。

「私共儀、以御威光業体罷在候處、近来、薪・油其外召仕給金等二至迄、莫大之高値相成候ハハ、湯錢増方奉願候所、其毎度御憐憫之御沙汰被成下、当夏中二至九文ツツ請取候様被仰付、難有仕合奉存候、然所此節、薪並油値段共又々引上、別紙ニ申上候通、諸色前代未聞之高値ニ相成、七、八年以前より三増倍ニ而、当時之湯錢ニ而も、中々相続行届兼、歎數次第奉存候、伏て又々奉願候も恐入奉存候得共、何卒格別之御憐憫を以、当分之内者壹文増、拾文ツツ請取候様被

仰付被下置候ハハ、一同家業永続仕、重々難有仕合可奉存候」。

「湯銭六文之時

一、中之俣塩木壹棚ニ付壹貫四、五百文

一、種油壹升ニ付四百五拾文位

戊年七文之時

」。戊年（文久二年、一八六二）湯銭七文の時、塩木一棚二貫二〇〇文、種油一升六七〇文。次の亥年八文の時、塩木二貫八〇〇文、種油七〇〇文。次ぎの子年に塩木三貫三〇〇文、種油は前年同。次の丑年湯銭九文の時、塩木三貫五〇〇文位、種油九六〇文位。これが同年「当節相場 一、中之俣塩木〓四貫文位 一、種油〓壹貫三百文位 右之通御座候以上 丑八月」となった。なお、中の俣は旧平田町の山間部に位置する。かつて浜中などの漁村で盛んに製塩を行っていた時、塩焚用として山村から送った薪を塩木と称していた。

これを受けた年寄・大庄屋は、「湯銭之儀、当六月中増方被仰付候所、又々申立候段、無濟限次第と奉存候内、薪・油其外諸品値段二引合候得ハ、過分之申立とも相見不申候間、〓」。湯屋の値上げ願いは際限ないものと思われるが、諸物価の値上げと比べても、願いは過分なものとは見えないので、願書を請け取り、沙汰してくれるよう奉行所に頼んだ。八月二十九日、酒田町奉行の國之助より数馬に、「〓薪・油其外諸品高値二而、致難洪候ニ付、湯銭増之儀、無餘儀次第二相聞候間、〓」と、湯銭の値上げはやむをえないことと聞いたので、家老に伝えてくれるよう依頼した。

九月十七日、数馬より國之助に、「〓酒田風呂屋共、湯銭増願之儀、無餘儀相見候間、当分之内、壹人ニ付拾文〓」と、「得御意」たとの返信があった。それを受け、「右、九月十八日御沙汰ニ付、湯屋年番へ申達候」。「一、湯銭男女十五才以上十文」、十才より十四才迄八文、六才より九才迄六文、一才より五才迄四文、「右者諸品高値ニ付、当分之内書面之通、増方被仰付候間、各扱下へ不洩様可被申達候已上 九月廿二日 月番 三町肝煎」が出された。

湯銭が十文に値上げが認められたばかりの丑十月二十日、又も湯屋年番から年寄・大庄屋に、鶴岡の湯銭と同じ十二文にしてもらいたいという次の口上書、「私共儀〓、薪・油・召仕給金等〓高値〓、当分之内、鶴ヶ岡同様壹人ニ付、拾式文ニ被仰付〓」が出された。二十一日、大庄屋・年寄が奉行所に書付を出し、十一月一日に許可された。

「一、湯銭男女拾五才以上拾貳文　　」、十才より十四才迄十文、六才より九才迄六文、一才より五才迄四文、「右者諸色高値ニ付、猶又書面之通、當分之内増方被仰付」　十一月二日」となった。

十二月に入ると湯銭のさらなる値上げ願いは無理と思つたものか、湯屋年番より今度は、「薪莫大之高値」となり、さらに「木掛り挽賃、丁持並舟賃迄是迄三増倍ニ相成」が出された。薪が大変な高値となり、薪を作る木挽賃、塩木を運ぶ船賃や丁持（運送業）賃が三倍にもなつて非常に困つているとして、これらの値下げ願いが出された。

なお、湯銭値上げ願いは安永六年（一七七七）にも出された。銭相場下落と薪類の高値を理由にして、一文増の六文の願い出である。

翌年六月、「近年、銭相場下値ニ相成、柴・薪類高値ニ而、風呂屋家業渡世難渋仕候ニ付、湯銭壹文増六文ニ被仰付被下置候旨、爰元惣風呂屋去冬中願出候得とも、夏中迄も見合、銭相場引上不申候ハハ可願出旨申達候」。経過は省略するが、十二月朔日になつて、「風呂銭先達而、壹文増六文ニ被仰付候處、銭相場引上候ニ付、前々之通五文ニ被仰付候旨、鶴岡御奉行所より申来」で、一旦は六文になったものの、結局、前と同じ「五文ニ被仰付候」（伊東家文書『安永七年　御用帳』）となつてゐる。

四、世相あれこれ

イ、河村瑞賢が幕府領米を西廻り航路によつて江戸に送ろうとして、最上川河口に御米置場（御囲）を建設したのは寛文十二年（一六七二）である。この御米置場に延享四年（一七四七）、盗賊が入つたことから、翌五年三月付の次の「御覚書」が、四月四日に渡された。その際、年寄・三町組大庄屋の鐙や・栗林・伊東・池田が御町奉行所に出頭させられ

ている（伊東家文書『延享五歳 御用控帳』）。

「一、御米置場へ入候盜賊追かけ候處ニ参かかり候ハハ、何者ニよらす立むかひ、追かけ候者之手傳仕、盜賊召捕可申候、若盜人と知なから見のかしニ仕候段、後日ニ相知候ハハ、急度曲事ニ可申付事」。盜賊を追いかけているところに出会った時は、何者でも盜賊に立ちむかい、追手の手伝いをし、盜賊を召捕る。もし盜賊と知りながら見逃して、あとから知れた時には罰する。

「二、右盜賊たとへハ高野濱抔江追（三字虫食い）、いつれ之家へ被入候様子ニ候ハハ、一村屋さかしいたし、嚴重ニ御詮議可被仰付事」。盜賊が御米置場の近くの高野浜村などに逃げ込み、どこかの家に入ったような場合は一村家さがしをしても嚴重に調べるよう仰せ付けること。

「一、夜中、御米置場後通近邊へ堅立寄申間敷候、若御用無之者近邊へ立かかり候者を見付候ハハ、夜廻り之者共、召捕参候様ニ申付候事」。夜中に御米置場の後ろ近辺に立ち寄らないこと。もし用のない者が近寄るのを見付けたら、夜廻りの者に召し捕るよう申し付ける事。

「右者、去年中、御囲之内へ盜賊入候由、重科之中之重科」。去年、御米置場に盜賊が入ったとのことだが、これは重い罪の中でもさらに重い罪。「此末、左様之儀有之候ハハ、末々迄嚴重御詮議可被仰付候間、此段近邊町方ハ勿論之儀、外町方名子之者共迄ニ委敷可申付候以上」。以後、このようなことがあった場合、嚴重に調査するよう仰せ付けられたので、近くの町は勿論だが、離れた町の名子にいたる迄、くわしく申し付けるように。

口、安永五年（一七六六）、新地の困窮者が物もらいに出かけて、悪口などをはき、問題となった。新地とは宝永三年（一七〇六）に、内町組の名子・借宅の者が家作を願ひ出て、市街地外れの北方砂山に百二十四軒の屋敷割が許可された所で、本来の内町組とは離れていたが、内町組に属した。のちの外野町・鷹町である。

「内町組新地困窮之もの袖乞ニ罷出、以之外悪口いたし候段、相聞候ニ付、以後右之者共袖乞ニ罷出候而も、一切為

取申間敷旨相觸候、尤内町組ニ而ハ右之者共へ以後袖乞ニ罷出不申候様嚴敷申達候（『野附家文書』安永五年 諸御用牒）。

ハ、安永七年（一七七八）、「四月廿七日夜ハツ時頃、十王堂町半四郎伴甚六と申者、兼而風聞不宜者二付、目明とも相尋候所、元米や町十左衛門名子善之助家ニ罷在候を見当、召捕候段目明とも申出候、尤腰縄ニいたし、善之助組内ニ預ケ差出候之由、翌廿八日酒田町之月番ニ申出候、檜物町之きも入孫右衛門へ相渡申候」。評判の悪い甚六を、目明が善之助の家にいるのを見つけ、縄でしばり、三十六人衆の月番に報告、檜物町の肝煎に引き渡された。

「五月朔日、十王堂町甚六御吟味被成候所、〳、致盜賊候趣、及白狀、牢舎被仰付候、〳」。甚六が取り調べられ、盜賊を白狀、牢屋入り。

「五月十七日、元米や町十左衛門名子善之介妻、去十一月中、盜賊甚六所より子共之着もの買候由〳」。十左衛門から借地している善之助の妻が去年の十一月、甚六から盜品の子供の着物を買った。妻はそのため事情を聞かれ、「御尋之通、去冬中、甚六より六百五拾文ニ買取申候」。そして「布相添、下内町徳右衛門方へ忝貫文ニ質入」と答えた。

徳右衛門の取り調べが行われ、「右之品、拙者方へ取請差置候〳、請返し差出候様ニ被仰付、同日受返候也、肝煎三右衛門を以、御役所へ為差出候所、御取上ニ相成候」。「獵師町板や与右衛門所ニ而、被盜取候品之内」のものであった。「五月十八日、盜賊甚六鼠ヶ関口他所追放」となった。「善之助困窮もの二付」、そして質屋徳右衛門も少々のも当なことはあったが、「内分申付候」と、罪にはされなかった（伊東家文書『安永七年 御用帳』）。

二、小舟乗りに関する色々な事件や問題が多く発生している。寛政八年（一七九六）に十王堂町・権助が荏（えごま）積み下しの仕事をし、それにかかる役銭を納めることになっていたので、肝煎が取り立てに行っても納めなかった。その後、町の小使が催促に行ったら、激しく悪口をあげせ、さらに取立帳を破った。前々から評判が悪いこともあって、船乗り家業取り上げられ、手鎖・親類預かりの処分である。

「山王堂町権助と申者、荏船積下シ、忝割方役所へ相届候二付、きも入甚右衛門、右之役銭取立ニ參候處、上納不致

候二付、其後小使を以、右御役錢催促いたし候処、甚敷悪口いたし、其上取立帳奪取、さし紙さき候よし、勿論兼而風聞不宜候二付、御奉行所江其段申上、手鎖親類預いたし置、相免し候節、船乗業取放候様、御伺申上候処、其通被仰付、被手鎖親類預申付候」(野附家文書『寛政八年 諸御用控』)。

ホ、天保三年(一八三三)九月十五日、天正寺町・大助の次男・与七が評判が悪く、捕まえ吟味したところ、所々で盜賊をやり、盜品は善次郎の嫁に頼んで質入れたという次の「御尋二付、乍憚以口上書申上候」が名護小路(現・二番町)の質屋・伊右衛門から米屋町大庄屋・池田吉兵衛に出された。

「天正寺町大助二男与七儀風聞不宜敷、此度被召捕、御吟味之上、所々二而、盜賊いたし、盜取候品御糺御座候所、給人町善次郎嫁取次為頼、質屋伊右衛門方江質入致置候旨、及白状候、其節之始末委しく申上候様被仰達、奉畏候、依之申上候、善次郎嫁之儀者、数年来取次いたし、私店江罷越候、ゝ」。

善次郎の嫁が質入れた品は、八月二日に男浴衣一枚・中浴衣一枚のメ二品で金壹歩を「貸遣申候」。同十七日には女単物一枚・肌子一枚・古(一字不明)表一枚、メ三品に壱貫八百文、同二十九日に男浴衣一枚・肌子一枚、メ二品に壱貫三百文である。

同年十月、「天正寺町大助二男 与七」に次ぎの「申渡之覚」が出された。

「其方所々二而、盜賊致し候趣二付、召捕遂吟味候処、両親老年、其上母者去年より相煩、兄者下筋へ稼之ため罷越、忝人手間二而、困窮之上、針葉之入用等其外(二字虫食い)多二相成、返済方相迫り、風与惡心差起り、ゝ」。両親は年老い、母は病氣、兄は出稼ぎ、一人の手間賃で針による治療や薬代などで費用が多くなり、借金返済も迫り、ふっと悪い心が起こってしまった。

次いで、「所々洗濯もの竿掛之品等盜取」、質入れたことは「不屈候得共、人家江忍入之事ニも無之故」、家の中には入らず、外の洗濯物を盗んだだけで、「両親老年困窮」であり、「風与惡心指起候趣」であるので、「格別之用捨ヲ以、

人足重溜壺ケ年、輕溜壺ケ年、都合二ケ年申付者也」。人足重溜・輕溜は懲役であろうか。

「給人町善次郎女房 つた」は伊右衛門以外にも「濱畑・佐次右衛門被盜取候品」「男帷子 二枚 質代七百五拾文」で、「濱町・弥三郎所」へ質入れ取り次ぎをしていた。そのため、つたは「天正寺町与七為頼、伊右衛門・弥三郎所へ四度質入致し候品者、右与七所々ニ而盜取候品」であり、それを「質取次、度々酒代貰受」したことが「不埒二付」、「酒代取上、慎」を申し付けられた。

質屋の伊右衛門と弥三郎への十月二日の「申渡之覚」は、「其方共盜物質ニ取置」し、「盜賊被召捕候後、届出二付」、「不埒二付、右品取上、質料損失之上、慎」。質として預かった品は取上され、つたに酒代として渡した質料も返されずである。謹慎は十日である。

同年十一月、親類の八軒町・清次郎等から「乍恐以書付御願申上候」が出された。「私共親類、天正寺町大助二男与七儀、不調法之儀」があつて、先月中「溜入被仰付」たが、今月十六日「溜場御役所」から与七が病氣になったと連絡があつた。親類の寺町・小平が行き、面談したところ快方に向かつてはいた。しかし宿下がり、養生のお願いである（野附家文書『天保三年壬辰正月吉日 御用帳』）。